

突如、現れた「激カワ爆乳ケモミミっ娘」欲望のままに調教できたら・・・

「おっる！ 嬉しいよココカゼちゃんの手かあ！ ちんこトロけそう...っくら!!  
「なんで、なんで拙者あ...んきゅ！ あッ...ああうッッ!!!」

「はあはあ...とうがなしオさま？ おちんぼ気持ちいいですかあ？」  
「だ、誰が...貴様など、本当なら指先一つで...くあッッ!!!」

# 調教 DAYS!!

～半モオタに飼われた巨乳ケモノ娘～

『いや〜突然にお邪魔して本当にごめんていやる』  
「いんか……え？」

（おうっふ！ 激カワ爆乳狐っ娘キタああーッツ！！）

『拙者はビスコッテイ共和国隠密部隊筆頭、  
ユキカゼ・パネトーネと申します』

『この状況を説明申し上げたいのでござるが、

実は拙者にもなにがなんだか……』

「び、ビスコ？ えっと、何かコスプレイベントで事件とか？」



『コスプレ？ いえ、拙者はアデル様に勇者召喚で転送されたと

思ったらくここに……おそらくアデル様がミスったていやる』

「あ、あの……話がよく分からないんだけど……」

『ひょっとしてここは……地球？』

シンク達の世界でござるか？ まさか……』

（う〜ん、耳も尻尾も本物みたいだし、

こんなカワイイ子疑うのもバカらしいかな……デュファア！）

『××殿と申したか、申し訳ないでござるが、  
少しこのまま休ませて貰えぬでござるか?』  
『地球にはフロニヤカ力の加護がないためか……  
さつきから身体が思うように動かず……』  
『は、はあ……』

『身体が回復したら、拙者は友人を探しに出るゆえ、  
そう長居はしないでござるよ』



『うくん、そうだね……困ってるみたいだし、  
僕は全然いいんだけど……』

『本当でござるか!? 助かるでござる!』

『ただし、君が危険な者じゃないことだけ確認させてよね』  
『もちろんでござる! 存分に確かめて下され!』

「それじゃ遠慮なく」

「ひゃッ！ なッ……いきなりなにを！」

「おんやあ？ なにかなこの大きな膨らみは……」

「ふあッ……んッ！ そ、そこにはなにも……ひゃん！」

「こんな大きいのに何も入ってない訳がないだろう？」

何を隠してるんだい？」



「い、誤解でござる……あッ……んッ……んう……」

「ふあッ……ああ……んッ！ な、なんでいけるか……」

身体が……はうッ！」

「お、おっぱいを触られるだけで……」

身体が……熱く……あんッ！」

『はッ……あッ……あッ……はあ……うッ……』  
『ご、このポリウム！ 柔らかさ……た、たまらんなあ……』  
『あッ！ はッ……あう……ダメえ……うう……』  
『どうしたんだいユキカゼちゃん、苦しそうだけど？』  
『く、苦しいわけではござらぬが……身体感覚があ……  
……いつもより敏感でえ……』

「な、何！  
こんなエロおっぱいの上にそんな……」  
『そ、そんなに揉まれたら……』  
ふあッ！ あふ……ふああ……』  
『おっぱいだけでそんなになるとは……おや？  
こっちも怪しいぞ？』

まゆまゆ  
もい  
ひひ



『はあツツ!~!』

「なんだこれは、ヌルヌルじやないか」

『そ、そこは……ダメ……ふああツ!~!』

身体がビリビリして……んツ! あツ……くあツ!』

「はあはあ……ふ、ふんどしだって?」

そっちの世界の文化なのかな?」

『ひやうツ! や、めえ……そんなにしたら……あツ! はあツ!』



「この中になにか危険なものはないかなあ?」

『やツ……やめツ……ひやう! ああツ……指……』

そんなトコに……はうツ!』

『そ、そんなにかき回しては……あツ! はああツ!~!』

「おや? このヨリヨリしたものはなんだろう? 胸にもあるようだね」

『ちよ……待ってください! そ、そこは……あツ! いや……はうツ!』

「フビビ！ ヨリヨリ……！」

「あツ！ いあツ……あツ！ だ、だめえ……」

「きやうツ！ はツ……ああツ！

そこお、触られたら、何も考えられなく……ふあツ！」

「あツ！ ああツ！ はあツ！」

ダメえ……やめ、やめえ……あツ！」

「おっふう！ ふお！ こ、これは……！」

「いやあツ！ だめ、だめえ！」

頭がビリビリして……はああツ……！」

「あツ……ああツ！ な、なにか来る……」

あツ！ はああーツツ！」



『はあ……はあッ……はあ……』

『あッ……あう……んッ……あッ……ふあ……』

『ふあッ……はッ……』『ごめん』『ごめん……』

『どうも身体感覚がおかしくて……』

『フビビ……身体検査でイッチャうなんてダメじゃないか』

『い、イッチャう？ あッ……それは一体……』

んッ……あッ……ふあ……』

(ひよっとしてこの子初イキ!?)

『頭がぼーっとして、身体がフワフワするでいける……』

『と、とりあえず君が危険じゃないのは分かったよ。』

『お友達探すのも手伝ってあげよう』

『ほ、本当でいけるか？ よ、よろしく頼むでいける……』

『今日は休んで明日一緒に出かけしようね！ デュフフ……』



『いや〜突然にお邪魔して本当にごめんていやる』  
「いんね……え？」

（おうっふ！ 激カワ爆乳狐っ娘キタああーッツ！！）

『拙者はビスコツティ共和国隠密部隊筆頭、  
ユキカゼ・パネトーネと申します』

『この状況を説明申し上げたいのでござるが、

実は拙者にもなにがなんだか……』

「び、ビスコ？ えっと、何かコスプレイベントで事件とか？」



『コスプレ？ いえ、拙者はアデル様に勇者召喚で転送されたと思っただらここに……おそらくアデル様がミスったていやる』

「あ、あの……話がよく分からないんだけど……」

『ひょっとしてここは……地球？』

シンク達の世界でござるか？ まさか……』

（う〜ん、耳も尻尾も本物みたいだし、

こんなカワイイ子疑うのもバカらしいかな……デュフフ！）

『××殿と申したか、申し訳ないでござるが、  
少しこのまま休ませて貰えぬでござるか?』  
『地球にはフロニヤカ力の加護がないためか……  
さつきから身体が思うように動かず……』  
『は、はあ……』

『身体が回復したら、拙者は友人を探しに出るゆえ、  
そう長居はしないでござるよ』



『うくん、そうだね……困ってるみたいだし、  
僕は全然いいんだけど……』

『本当でござるか!? 助かるでござる!』

『ただし、君が危険な者じゃないことだけ確認させてよね』  
『もちろんでござる! 存分に確かめて下され!』

「それじゃ遠慮なく」

「ひゃッ！ なッ……いきなりなにを！」

「おんやあ？ なにかなこの大きな膨らみは……」

「ふあッ……んッ！ そ、そこにはなにも……ひゃん！」

「こんな大きいのに何も入ってない訳がないだろう？」

何を隠してるんだい？」



「い、誤解でござる……あッ……んッ……んう……」

「ふあッ……ああ……んッ！ な、なんでいけるか……」

身体が……はうッ！」

「お、おっぱいを触られるだけで……」

身体が……熱く……あんッ！」

『はッ……あッ……あッ……はあ……うッ……』  
『ご、このポリウム！ 柔らかさ……た、たまらんなあ……』  
『あッ！ はッ……あう……ダメえ……うう……』  
『どうしたんだいユキカゼちゃん、苦しそうだけど？』  
『く、苦しいわけではござらぬが……身体感覚があ……』  
『……いつもより敏感でえ……』

「な、何！  
こんなエロおっぱいの上にそんな……」  
『そ、そんなに揉まれたら……』  
ふあッ！ あふ……ふああ……』  
「おっぱいだけでそんなになるとは……おや？  
こっちも怪しいぞ？」

もい  
まゆ  
び  
び

『はあツツ!~!』

「なんだこれは、ヌルヌルじゃないか」

『そ、そこは……ダメ……ふああツ!~!』

身体がビリビリして……んツ! あツ……くあツ!』

「はあはあ……ふ、ふんどしだって?」

そっちの世界の文化なのかな?」

『ひやうツ! や、めえ……そんなにしたら……あツ! はあツ!』



「この中になにか危険なものはないかなあ?」

『やツ……やめツ……ひやう! ああツ……指……』

そんなトコに……はうツ!』

『そ、そんなにかき回しては……あツ! はああツ!~!』

「おや? このヨリヨリしたものはなんだろう? 胸にもあるようだね」

『ちよ……待ってくだされ! そ、そこは……あツ! いや……はうツ!』

「フビビ！ ヨリヨリ……！」

「あツ！ いあツ……あツ！ だ、だめえ……」

「きやうツ！ はツ……ああツ！」

そこお、触られたら、何も考えられなく……ふあツ！」

「あツ！ ああツ！ はあツ！」

ダメえ……やめ、やめえ……あツ！」

「おっふう！ ふお！ こ、これは……！」

「いやあツ！ だめ、だめえ！」

頭がビリビリして……はああツ……！」

「あツ……ああツ！ な、なにか来る……」

あツ！ はああーツツ！」



『はあ……はあッ……はあ……』

『あッ……あう……んッ……あッ……ふあ……』

『ふあッ……はッ……』『ごめん』『ごめん……』

『どうも身体感覚がおかしくて……』

『フビビ……身体検査でイッチャうなんてダメじゃないか』

『い、イッチャう？ あッ……それは一体……』

んッ……あッ……ふあ……』

(ひよっとしてこの子初イキ!?)

『頭がぼーっとして、身体がフワフワするでいける……』

『と、とりあえず君が危険じゃないのは分かったよ。』

『お友達探すのも手伝ってあげよう』

『ほ、本当でいけるか？ よ、よろしく頼むでいける……』

『今日は休んで明日一緒に出かけしようね！ デュフフ……』



































「これはまた面白い乗り物でござるな！」

「ユキカゼちゃんの世界には電車はないの？」

「はい。このように大勢で、

これほどの速度で移動する乗り物はないでござるよ」

「それはつまらな……いや、不便そうだね。フビビ……」

「シンクのトルネーターくらゐ早いでござるし、

見晴らしも最高でござる！　いらものでござるな」

「そうだね……フビツ！　景色を眺めていれば

その内お友達が見つかるかもよ？」

「なるほど！　それは名案でござるー！」

「デユビビ……」

『ひゃうー!』

『どうしたんだい?』

『そ、その……お尻に手が……』

「デユフフ……揺れが酷いからね。電車ではよくあることさ、ごめんね」  
『そ、それは構わないでござるが……』

そ、それにしても手つきが……あう……』

『はあはあ……すごい……柔らかくて、指がどこまでも沈み込む!』

『あう……んツ! ××殿……それにしても、』

この衣装は……なんで下着まで……』

『え? ああ、この世界での女の子の「一般的な衣装だよ」

『そ、そうでござるか?』

周りとは違って「か変なような……」

んツ! あツ……』



『ひきゅー!』

「こらこら、電車の中で大きな声を出しちやダメだよ?」

『し、しかし……あッ! ……そこは……はうッ!』

(はあはあ……ブヒヒ! 巨乳ケモ耳娘に痴漢サイコー!)

『いやッ……あッ……ああ……んッ! だ……めえ……』

『××殿の指が……

食い込んで……くぁッ! ああ……』

『そ、そんなに触られたら……んッ! ふあ……』

もいば

42 42

「いかん！ 電車の揺れが！」

『ひあッ！ あッ！ ……ふあああッ！！ ダ、ダメでござる……  
また身体が、ビリビリして……』

『あッ！ やあ……指が……あッ！ ふああーッッ！！』

「なんだ……どうした？」

『はッ……あッ……ああ……拙者また……ヘンになって……』

「なんだよアレ？ コスプレAV？」

「こ、これはまずい……ユキカゼちゃん、次の駅で降りるよ？」

『ふあ？ はあ……ふあい……』

きゅん

グッ  
チ  
ニヤット













「ひゃッ！ ちよ……××殿！ なにを！」  
「デユフツ……ガマンするからいけないんだよユキカゼちゃん……  
一度、思う存分したいことすれば、きつと身体も治まるよ」  
「そ、そんなバカな……それに拙者は別にこんなことなどは……」  
「きつと眠たいとかお腹減ったとかと同じ感覚だよ。  
身体が生存本能で必要な物を求めてるんだ」



「こ、これが……必要なこと？」  
ふあ……確かに匂いを嗅ぐだけで……身体が疼いて……」  
「ほらほら、手始めにこれをペロペロしてごらん？」  
「あッ……うツ……くう、ふあ……」  
しかし、××殿は……いいのでござるか？」  
「ユキカゼちゃんの力になれるなら僕は歓迎だよ！」  
「そ、そう言っただけなら……」  
「す、少しだけ、お言葉に甘えるでござる……」



「んッ……ちゅる……ちゅべ……」

「おふう！ ユキカゼちゃんのお口が僕のチンポをお！」

「あッ……ふう……んッ……あッ……ふぁ……あッ……うッ……  
へんな味でいける……でも……んちゅ……」



「んあッ……ちゅる……うたえ……うたえ……ちゅら……」

「熱っっっける……ほッ……んちゅ……ちゅる……ちゅべ……」

「ますます、身体が疼いて……んッ……ちゅる……ちゅ……」

『あふ……ふああ……んッ！ ああ……ちゅ……』

『フビビ……どどんエロい顔になってるよ？ ユキカゼちゃん』

『んッ……ちゅる……身体が、キュンキュンして……』

『ふあッ……んッ……どまらならでいいから……あッ……ちゅる……』



『……なんでこんな……』

『だんだんと、おいしくなってきた……くんでいいの』

『ちゅる……ちゅ……ちゅ……ちゅぽりゅりゅ……』

『おっほう！ い、今もっとおらしいの飲ませて上げるからねー！』

『んあ？ なんでござるか？ ちゅる……ちゅ……ちゅぽりゅりゅ……』

『ふあ……なんだか口の中でピクピクして……んッ！』

「イクラウー!!」

「んぐツ!! んううう!! ンツ! ふぐツ!!」

「射精してる! 狐っ娘のかわいいお口でっ!!」

「んうう! んぐツ! んううーツツ!!」

「は、吐いちやダメだよ! 飲んでもダメ! 口の中に溜めるんだ!」

「んツ……ううう……うう……んツ!」

「おふツ! 歯がカリに当たって……またイクう!」

「ふうううーツツ!!」



『あッ！ あふうう……あッ……ふぁッ……』

『はぁ……出した出した。』

ほらユキカゼちゃん、お回あくんしてごらん？』

『ふぁ……んあ？ ムーでいじやるか？』

はぁはぁ

とろろ…

『はぁはぁ……僕の精液がお回たらっばらだねえ……』

フドド、フドド……』

『ああ……あうう……は、恥ずかしらでいける……』

『それにコレ……舌が溶けるよう……あッ……んあ……』

「はい次はお口を閉じて？ 口の中でくちゅくちゅするんだ」  
「んっ……んあ……くちゅ……くちゅ……」

「たっぷり味を確かめるんだよ？ どうだい？ 美味しい？」

「うう……濃すぎて……ろろろろ、しゃみしたら……」  
「苦くて……でも……んあ……」  
「なにこれえ……身体が気持ちいらでいける」  
「ほら、味わい終わったら……つくんするんだ」  
「んっ！ うう……んっ！ っん……っんあ……っんあ……」



『ふああ……あッ……ああ……』

『どうだい？ すっきりしたかい？』

『だ、ダメでござる……ますます、身体が、火照って……ふあ……い、今のは一体……身体の中で……暴れるような……あッ……』  
『え、えっと……こっちの世界で男だけが精製出来る  
フロニヤカの濃縮液なんだよ』



『ほ、本当でござるか？ 拙者初耳でござるが……』

(大嘘でござる！)

『あう……ふあ……ダメでござる……』

『頭がポーっとして……何も考えられなく……』

『デユフフ……それはいけないなあ……』

『今日は一端切り上げてウチに帰ろうか。続きはゆっくり、家でね？』

『ほう……そうして頂けると、助かるでござるが……』

『まだ、なにかするでござるか？』



















「あッ！ うッ……はあ……あッ……ああ……」

「あッ……ああ、ドロドロが……奥までえ……拙者の、ナカに……ああ……」

「はあ……はあ……良かったよユキカゼちゃん……」

「あう……あッ……ああ……あッ！」

「ふああ……んッ！ 頭が……ダメえ……」

「もう何も、考えられな……あッ！ あう……うッ……」

「デユフフ、これを繰り返せばきつと力が戻るよ。」

「これから毎日してあげるからね！ いいでしょ？」

「ふあ……あ……ほえ？ ……あッ」

「……はら、よるしく頼むわい……」



「おぐツ!! ふおお!! ユキカゼちゃんにナカダシいい!!」

「あツ! はああツ!! あついい! あついい!!」

「やあ! 拙者のナカでえ……」

ピクピクして……ふああツ!!」

「おツ! おおっう!! チンコ溶ける!!」

「はあツ……うツ! あツ!!」

はああツ!! いやああツ!!」

「お、奥に! 奥に入ってくるでいいわー!」

なんかヘンなのがあ! はああーツツ!!」

ドッ

グッ  
グッ  
グッ

ルッ





『あぐツ！ あツ……ああ……い、イチモツが、奥までえ……いきゅ！』  
「イチモツなんてつままない言い方……」

おちんぼって言うて欲しいなあ……」

『あうツ！！ ふああツ！ おちんぼお！』

おちんぼきてるうう！！』

『あツ！！ あああツ！ せ、拙者のおくう……』

ごっごっ叩いて……ふああツ！！』

『いぐツ！ がツ！ はああツ！！ だめえ……あツ！』

おかしくなる！ おかしくなるうう！！』

グ  
チユ

グ  
チユ

ん  
ん

「イクの？ イキそうなのユキカゼちゃん？ うひよ！

二人でいっしょにイこうね！」

『いやツ！ だめえ！ だめええツ！！』

はああーッツツ！！』

『はあッ！ あああーッッ！』

「おっふ！ 凄いやユキカゼちゃんのナカあ！

ちんこト回けそう……つくう！」

『なんで、なんで拙者あ……んきゅ！ あッ……ああッッ！』

「デユフフ……これはね、

フロニヤカを直接送り込むための儀式なんだよ」

『ひやう！ こ、これが？

あッ！ んうッ！ ふああッ！！』

「フヒヤ！ 乳揺れすっげえ！

最高だユキカゼちゃん！ もっと動くよ！」

70/16/14

70/16

ずちゅ

『いやッ……だめえ……あう！！ あッ！ ふああーッ！！

ダメエー！！ 大きすぎて……あッ！ はあうッ！！』

「も、もっと奥まで！ アヒヤ！」

『ひぐッ！ あッ……ああッ……やめ……もも……はああッ！！』

「あッ！ うッ……はあ……あッ……ああ……」

「あッ……ああ、ドロドロが……奥までえ……拙者の、ナカに……ああ……」

「はあ……はあ……良かったよユキカゼちゃん……」

「あう……あッ……ああ……あッ！」

「ふああ……んッ！ 頭が……ダメえ……」

「もう何も、考えられな……あッ！ あう……うッ……」

「デユッフ、これを繰り返せばきつと力が戻るよ。」

「これから毎日してあげるからね！ いいでしょ？」

「ふあ……あ……ほえ？ ……あッ」

「……はら、よるしく頼むわい……」



「おぐツ!! ふおお!! ユキカゼちゃんにナカダシいい!!」

「あツ! はああツ!! あついい! あついい!!」

「やあ! 拙者のナカでえ……」

ピクピクして……ふああツ!!」

「おツ! おおっう!! チンコ溶ける!!」

「はあツ……うツ! あツ!!」

はああツ!! いやああツ!!」

「お、奥に! 奥に入ってくるでいいわー!」

なんかヘンなのがあ! はああーツツ!!」

ドッ

グッ  
グッ  
グッ



『あぐツ！ あツ……ああ……い、イチモツが、奥までえ……いきゅ！』

『イチモツなんてつままない言い方……』

おちんぼって言うて欲しいなあ……』

『あうツ！！ ふああツ！ おちんぼお！』

おちんぼきてるううう！！』

『あツ！！ あああツ！ せ、拙者のおくう……』

ごっごっ叩いて……ふああツ！！』

『いぐツ！ がツ！ はああツ！！ だめえ……あツ！』

おかしくなる！ おかしくなるううう！！』

グ  
チユ

グ  
チユ

ん  
ん

『イクの？ イキそうなのユキカゼちゃん？ うひよ！』

『二人でいっしょにイこうね！』

『いやツ！ だめえ！ だめええツ！！』

『はああ……ツツ！！』

『はあッ！ あああーッッ！』

「おっふ！ 凄いやユキカゼちゃんのナカあ！  
ちんこト回けそう……つくう！」

『なんで、なんで拙者あ……んきゅ！ あッ……ああッッ！』

「デユフフ……これはね、

フロニヤカを直接送り込むための儀式なんだよ」

『ひやう！ こ、これが？

あッ！ んうッ！ ふああッ！』

「フヒヤ！ 乳揺れすっげえ！

最高だユキカゼちゃん！ もっと動くよ！」

70/16/16

70/16

ずちゅ

『いやッ……だめえ……あう！！ あッ！ ふああーッ！！

ダメエー！ 大きすぎて……あッ！ はあうッ！！』

「も、もっと奥まで！ アヒヤ！」

『ひぐッ！ あッ……ああッ……やめ……もも……はああッ！！』



















《んツ……くぁ……あツ！ ……は？ はぁぁぁー！…！？？》

「デュフツ！ お、おはようございませうレオ閣下！」

《ま、待て貴様なにをして……くぁツ！ ぶ、無礼者……！》

《な、なんじゃココは……》

ワシは確かパステイヤーージュの実験に付き合っていて……あぐツ！》

《あツ……はあツ！ や、やめる……ああツ！ くツ……あツ！

貴様ワシを誰だと思つて……はあツ！》

《あツ！ はツ……ああツ！  
な、何故じゃ……力が全く入らん……  
いツ！ くぁあツ……！》

「おっふ！ ユツキーのおっぱいに勝るとも劣らぬ巨乳……！  
たまらん……！」

《はあツ！ あツ……あツ……くう……い、今貴様なんと……》

『××殿おしく拙者も混ぜてほしいでござるうう……んツ……ちゅツ』  
《なツ！ て、天狐！ どうしてお前まで……はあぐツ！》  
『ちゅば……ふあ、お久しゅうございますレオさまあ……  
××殿には拙者から紹介しておいたでござる』  
《んツ！ くあ……お、お前なんじゃこの匂いは……いぐツ！》  
『さっきまで××殿におまんこして頂いておりましたので……  
イカ臭いでござるか？』

《なツ……何を言ってるのかわから……はあツ！ いあツ！》

『んツ……ちゅツ……ちゅる……』

レオさまもおまんこしていればすぐ元気になるでござるよお〜

《な、なにを言って……ふあツ！》

な、なんだ……ワシのナカで何か動いて……》



「フヒッ！ 領主閣下にナカダシいい！！」

《はあッ！！ あああーッッ！！》

《な、なんじゃ……何かナカで跳ねて、入ってきて……》

はああーッッ！！》

『せ、拙者もう……んッ！ あッ……ふあッ！』

《ちよ、待て……さやあ！ ふあッ！ お、お前ツシの顔に……》

フヒッ

「はああ……キスだけでお潮吹けるようになったねユツキー」

『はああ……××殿お……拙者もっとお……』

《あッ……ふあッ……なんじゃ……これは……》

腹の下が熱く……あッ……はああ……》

《あッ……ああ……なにをする……》

「フビビ、レオ閣下？ 安心してね？ 僕がちゃんと面倒みてあげるから」

「とにかく、地球にいくと、君たちはおまんこしないと  
生命そのものが危ないみたいなんだよ」

あ

はぁ

はぁ

《ば、バカが……そんなことがあるわけなからう……》

「いやいや、現にだんだんユツキーも元気になってきてるからね……  
フビビビー」

《クン……どうしてこんなこと……カナルビ……ガウル……》

《んツ……くぁ……あツ！ ……は？ はぁぁぁー！…！？？》

「デュフツ！ お、おはようございませうレオ閣下！」  
《ま、待て貴様なにをして……くぁツ！ ぶ、無礼者……！》

《な、なんじゃココは……》

ワシは確かパステイヤーージュの実験に付き合っていて……あぐツ！》

《あツ……はあツ！ や、やめる……ああツ！ くツ……あツ！

貴様ワシを誰だと思つて……はあツ！》

《あツ！ はツ……ああツ！  
な、何故じゃ……力が全く入らん……  
いツ！ くぁあツ……！》

「おっふ！ ユツキーのおっぱいに勝るとも劣らぬ巨乳……！

たまらん……！」

《はあツ！ あツ……あツ……くう……い、今貴様なんと……》

『××殿おしく拙者も混ぜてほしいでござるうう……んツ……ちゅツ』  
《なツ！ て、天狐！ どうしてお前まで……はあぐツ！》  
『ちゅば……ふあ、お久しぶりございますレオさまあ……  
××殿には拙者から紹介しておいたでござる』  
《んツ！ くあ……お、お前なんじゃこの匂いは……いぐツ！》  
『さっきまで××殿におまんこして頂いておりましたので……  
イカ臭いでござるか？』

《なツ……何を言ってるのかわから……はあツ！ いあツ！》

『んツ……ちゅツ……ちゅる……』

レオさまもおまんこしてればすぐ元気になるでござるよお〜

《な、なにを言って……ふあツ！》

な、なんだ……ワシのナカで何か動いて……》

「フヒッ！ 領主閣下にナカダシいい！！」

《はあッ！！ あああーッッ！！》

《な、なんじゃ……何かナカで跳ねて、入ってきて……》

はああーッッ！！》

『せ、拙者もう……んッ！ あッ……ふあッ！』

《ちよ、待て……さやあ！ ふあッ！ お、お前ツシの顔に……》

フヒッ

「はああ……キスだけでお潮吹けるようになったねユツキー」

『はああ……××殿お……拙者もっとお……』

《あッ……ふあッ……なんじゃ……これは……》

腹の下が熱く……あッ……はああ……》

《あッ……ああ……なにをする……》

「フビビ、レオ閣下？ 安心してね？ 僕がちゃんと面倒みてあげるから」  
「とにかく、地球にいくと、君たちはおまんこししないと  
生命そのものが危ないみたいなんだよ」

あ

はぁ

はぁ

《ば、バカが……そんなことがあるわけなからう……》

「いやいや、現にだんだんユツキーも元気になってきているからね……  
フビビビー」

《クン……どうしてこんなことだ……カナルビ……ガウル……》



















《はぁあッ! ふぁッ! あッ……はぁあッ!》

「はぁはぁ……どうかなレオさま? おちんぽ気持ちいいですか?」

《だ、誰が……貴様など、本当なら指先一つで……くぁあッッ!》

《なぜじゃ……身体が、まるでいうことを……あッ……いあッ!》

「こっちはフロニヤカが本当にゼロでござるから、我々の身体に変化が起き

《くぁ……ふざけたことを……んッ! あッ……はぁあッ!》

《ふ、太くて……お、大きいすぎじゃ……

この……あッ! はぁあッ! あッ!》

「デユフフ……光栄でございます。気持ちいいでしょう?」

《バカか……こんなこと……気持ち悪いだけじゃ……》

「そうかな? じゃあこんなのはどうか?」

あッ  
あッ

《はあッ！ いッ……あッ！ はああ！！ な、ナカが掻き回されて……》  
「ふんっ。気持ちさらさらっしょっ。」

《き、貴様やめ……んッ！ あッ……はあう……あッ！ かあッ！》

「おふッ！ 締まるー！ ユッキーはふわふわのおまんこだけど、  
閣下はキツキツおまんこだね！」

ユキバ



《クッ……やめる……やめるお……ふあッ！

あッ……らあ……くもあッ……》

「くお、そんなに締め付けて……フビビー

分かり申した、直ちにドピュドピュしますぞー！」

《なッ……やめ……やめるおお……》



《はあッ！ あッ……ああ——ツツ！》

「くおお！ おお……搾り取られる！」

《いあ！ な、ナカに入ってきて……んッ！ ああ……はあッ！》

「おぐう！ すげッ！ レオさまのおまんこすげッ締め付ける……」

うおお……！！！！」

ぐわんぐわん

《はああッ！ あッ……ふああ——ッ！……ま、まだピクピクして……ふあッ！ はああ……》

《うツ……あツ……はあ……ああ……》

「はあはあ……チンコもげるかと思った……どう？」

力が漲ってくる感じがするでしょ？」

《あふ……あツ……ああ……頭が、くらくらして身体が……

ふわふわと……》

「フビビ！ 続けていけば

すぐ身体も元のとおり動くようになるからね！」

とろし

はあ

《だ、黙れえ……見てる、身体が動くようになってたら、  
その首真っ先にはねてくれる……》

「さして……それじゃ、レオさまのためにもうひと頑張りするか！」

《あツ……うツ……なんじゃ……なにを……》

《はぁあッ!ー! ふぁッ! あッ……はぁあッ!ー!》

「はぁはぁ……どうかなレオさま? おちんぽ気持ちいいですか?」

《だ、誰が……貴様など、本当なら指先一つで……くぁあッッ!ー!》

《なぜじゃ……身体が、まるでいうことを……あッ……いあッ!ー!》

「こっちはフロニヤカが本当にゼロでござるから、我々の身体に変化が起き

《くぁ……ふざけたことを……んッ! あッ……はぁあッ!ー!》

《ふ、太くて……お、大きいすぎじゃ……

この……あッ! はぁあッ! あッ!》

「デユフフ……光栄でございます。気持ちいいでしょう?」

《バカか……こんなこと……気持ち悪いだけじゃ……》

「そうかな? じゃあこんなのはどうか?」

4201

《はあッ！ りッ……あッ！ はああ！！ な、ナカが掻き回されて……》  
「ふんっ。気持ちさらさらっしょっ。」

《き、貴様やめ……んッ！ あッ……はあう……あッ！ かあッ！》

「おふッ！ 締まるー！ ユッキーはふわふわのおまんこだけど、  
閣下はキツキツおまんこだね！」

ユッキ  
ハ

《クッ……やめる……やめるお……ふあッ！  
あッ……らあ……くもあッ……》  
「くお、そんなに締め付けて……フビビー  
分かり申した、直ちにドピュドピュしますぞー！」  
《なッ……やめ……やめるおお……》



《はあッ！ あッ……ああ——ツツ！——》

「くおお！ おお……搾り取られる！」

《いあ！ な、ナカに入ってきて……んッ！ ああ……はあッ！》

「おぐう！ すげッ！ レオさまのおまんこすげッ締め付ける……」

うおお！——！——」

ぐわんぐわん

《はああッ！ あッ……ふああ——ッ！——  
ま、まだピクピクして……ふあッ！ はああ……》

《うツ……あツ……はあ……ああ……》

「はあはあ……チンコもげるかと思った……どう？」

力が漲ってくる感じがするでしょ？」

《あふ……あツ……ああ……頭が、くらくらして身体が……

ふわふわと……》

「フビビ！ 続けていけば

すぐ身体も元のとおり動くようになるからね！」

とろし

はあ

《だ、黙れえ……見てる、身体が動くようになってたら、  
その首真っ先にはねてくれる……》

「さして……それじゃ、レオさまのためにもうひと頑張りするか！」

《あツ……うツ……なんじゃ……なにを……》



















《んツ……くちゅ……うツ！ あ……この、変態が……》

「はああ……ユツキーもレオさまもいいおっぱいしてるなあ……」

《ひやう！ んツ……くう……あツ！》

そんな乱暴に、するな……ふあツ！

「フビビ……感度はユツキーよりさらに感じっ……」

ハリも弾力もあって……おふツー！



《くちゅ……んツ！ ちゅちゅアインツを引合わせると詰すな……》

「あらいめんね、今はレオさまと僕のおまんこだもんねー」

「んツ……」

《いの、救らよりのならメカが……んツ！ ふツ……うう……あツー！》

《くぁ……んツ……く、臭いぞ……》

「失礼な、半分はレオさまのおまんここの臭いだよ？  
それにこの臭い好きでしょう？」

《勝手なことばかり抜かしおって……あッ……んツ……ちんぽ……はう……》

「ほらレオさま、深呼吸して……」

「フヒヒ、エッチな匂いからフロニヤカを取り込もうね」

ちんぽ

ちんぽ

ズッ

ズッ

《んツ……くう……うツ……あッ……ふッ……》  
「フヒヒ、乳首ユリッユリッしちゃって……感じてるのかなレオさま？」  
《ひゃぐー！ あッ……ちんぽ……あッ……あッ……はあッ……！》  
「あれれ無視セード？ ちんぽだよじゃあ。」

その間レオさまのおっぱいを玩具として使わせてもらおうから

《あう……んツ！ あッ……ちんぽ……あッ……あッ……》





「デユフフ！ レオ様のピチピチおっぱいとお顔にぶっかけえー！」  
《はあッ！ きやうー！！ あ、熱ッ！ ふあッ……ああ……》  
「おぐツ！ ま、まだ出るう！ おっぱいまんこ最高！ デユフフー！」  
《くあ！ んッ！ か、顔が……あッ！ いぐ……う、ああ！》

ユツ♡

ユルル

ユルル

《あッ……はッ……はう……ああ……に、匂いが……》

「はあはあ……どうかな？ ザーメンシヤワー気持ちいい？」

《……くあ……うッ……うう……最悪に決まっておるうが……》

「レオさまも早くユツキーみだいに素直になれるといいねえ」

《はあ……言葉すら通じないのかこのケダモノは……》

「あらら、猫耳っ娘にケダモノ扱いされちゃったよ……」

デムフンフン」

《んツ……くちゅ……うツ！ あ……この、変態が……》

「はああ……ユツキーもレオさまもいとおっぱいしてるなあ……」

《ひやう！ んツ……くう……あツ！》

そんな乱暴に、するな……ふあツ！

「フビビ……感度はユツキーよりさらに感じっ……」

ハリも弾力もあって……おふツー！

いゆる

毛むしゅ

《くちゅ……んツ！ ちゅちゅアインツを引合わせると……》

「あらいめんね、今はレオさまと僕のおまんこだもんねー」

「ムム……」

《この、救らよりのならペカが……んツ！ ふツ……うう……あツー！》

《くぁ……んツ……く、臭いぞ……》

「失礼な、半分はレオさまのおまんこまんこの臭いだよ？」  
それにこの臭い好きでしよう？」

《勝手なことばかり抜かしおって……あツ……んツ……ちんぽはう……》

「ほらレオさま、深呼吸して……」

「フヒヒ、エッチな匂いからフロニヤカを取り込もうね」

まんこ

ちんぽ

ズ

ズ

《んツ……くう……うツ……あツ……ふツ……》  
「フヒヒ、乳首ユリツユリにしちやっ……感じてるのかなレオさま？」  
《ひゃぐー！ あツ……らあツ……あツ！ はあツー！》  
「あれれ無視セード？ ちらよじやあ。」

その間レオさまのおっぱいを玩具でなせてもらうから

《あう……んツ！ あツ……ふあ……あツ……》



「デユフフ！ レオ様のピチピチおっぱいとお顔にぶっかけえー！」  
《はあッ！ きやうー！！ あ、熱ッ！ ふあッ……ああ……》  
「おぐッ！ ま、まだ出るう！ おっぱいまんこ最高！ デユフフー！」  
《くあ！ んッ！ か、顔が……あッ！ いぐ……う、ああ！》

《あッ……はッ……はう……ああ……に、匂いが……》

「はあはあ……どうかな？ ザーメンシヤワー気持ちいい？」

《……くあ……うッ……うう……最悪に決まっておるうが……》

「レオさまも早くユツキーみたいに素直になれるといいねえ」

《はあ……言葉すら通じないのかこのケダモノは……》

「あらら、猫耳っ娘にケダモノ扱いされちゃったよ……」

デムフフフ



















《あうツ……あッ！ はッ……くああ……んツ！！》

はあッ！ やめる……やめるお！》

「フビビ！ 最高だよレオさま！」

《こ、こんな服まで用意しておって……変態が……ふあッ！  
はああッ！…！》

「はあはあ……まさかオナニー用に買っておいた奴を  
こんな子に来て貰えるなんて……」

《ふあッ……あッ！ はう……んツ！

お、奥まで当たって……はあッ！》

「デュフフ……相変わらずレオさまのオマンコは  
キュウキュウ締め付けるなあ……」

《あふツ……んツ！ ああ……ふッ！ あッ！

はう……あッ！ やめる……そんな、突き上げたら……

胸も、揺れて……服にこすれて……はあッ！》



あ

じゅるるー  
ちゅぱ

毛ニユ

「フヒッ！ それはけしからん！」

《ひやうッ！ あッ！ はああッ！！》

「おほッ！ レオのピチピチおっぱいに手が沈み込むうー！」

《あッ！ んッ……また、胸ばかり……んッ……あッ！ はあッ！》

「フヒヒ、やっぱり柔らかさとポリウムならユツキーだけど、  
張りと弾力はレオさまの勝ちだね！」

《はうッ！ あッ……はあッ！ う……この、ケダモノが……

嬉しくもないわ……》

《ああッ！ はあッ……んッ！ 布地の感触で

、余計に刺激が……くあッ！》



《ひぐツッ!! ぁあッ! あッ……はああッッ!!》

「デユフフ! 乳首を弄るとおまんこがキュンキュン反応するお!」

《あッ! ふうッ! んう……こ、これえ……》

直接触られるより……はあッ!!》

「そ〜れコリコリ〜」

《あッ! はあ……んうッ! あッ……はッ……ああッ!!》

だ、めえ……んぐツ……あッ!! はああッ!!》

「おふう! たまらん!

キュンキュン絞られてイっくうう〜ッ!」



《はあッ！ あッ……ああ……熱いのが入って来て……》

「はあはあ……気持ち良過ぎだよレオさま……くお！  
まだ搾り取られる……」

《くあ……あッ！ だ、黙れえ……ワシは……天狐のように……  
いかんぞ……》

「フヒビ！ レオちゃんも早く  
ユツキーみたいになってくれたらいいんだけどなあ……」

《あう……んあッ……はあ……

必ず、まともに動けるようになったら……まずは、

この……凶悪なイチモツから……あう！》

《あッ！ はあ……まだピクピク動いて……

んッ！ はあ……あッ！》

「デユフフ……早く元気になるといいねえ……」



《あうツ……あッ！ はッ……くああ……んツ！！》

はあッ！ やめる……やめるお！》

「フビビ！ 最高だよレオさま！」

《こ、こんな服まで用意しておって……変態が……ふあッ！  
はああッ！！》

「はあはあ……まさかオナニー用に買っておいた奴を  
こんな子に来て貰えるなんて……」

《ふあッ……あッ！ はう……んツ！》

お、奥まで当たって……はあッ！》

「デュフフ……相変わらずレオさまのオマンコは  
キュウキュウ締め付けるなあ……」

《あふツ……んツ！ ああ……ふッ！ あッ！》

はう……あッ！ やめる……そんな、突き上げたら……

胸も、揺れて……服にこすれて……はあッ！》

あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

毛ニユ  
じゅるるー  
ちゅばら

「フヒッ！ それはけしからん！」

《ひやうッ！ あッ！ はああッ！！》

「おほッ！ レオのピチピチおっぱいに手が沈み込むうー！」

《あッ！ んッ……また、胸ばかり……んッ……あッ！ はあッ！》

「フヒヒ、やっぱり柔らかさとポリウムならユツキーだけど、張りと弾力はレオさまの勝ちだね！」

《はうッ！ あッ……はあッ！ う……この、ケダモノが……

嬉しくもないわ……》

《ああッ！ はあッ……んッ！ 布地の感触で

、余計に刺激が……くあッ！》

《ひぐツッ!! ぁあッ! あッ……はああッッ!!》

「デユフフ! 乳首を弄るとおまんこがキュンキュン反応するお!」

《あッ! ふうッ! んう……こ、これえ……》

「直接触られるより……はあッ!!》

「そ〜れコリコリ〜」

《あッ! はあ……んうッ! あッ……はッ……ああッ!!》

「だ、めえ……んぐツ……あッ!! はああッ!!》

「おふう! たまらん!

「キュンキュン絞られてイっくうう〜ッ!」























《信じられん……信じられん……》

「こんな、バカなことを……」

『さ、流石に拙者もこれはちよつと……』

「恥ずかしいでござる」

「二人が運動したいって言うからお散歩に

来たんだけどなあ……不満かな？」

《おのれ……覚えていろ……》

身体さえ元に戻れば、この屈辱は、

かならず返してやる……」

『あう……んツ……歩くとなかで、

玩具が……ゴロゴロして……』

《下らんことばかりしおつて……》

くあツ……くあツ……あツ……あツ……」

『うう……あツ！んツ！

ああ……はツ……んツ！

××殿お……

拙者、切ないでござるう……」

「フヒヒ！もうちよつと待っててね、

お楽しみはこれからだよ」



《……あッ……くぁ……んッ！ あ……》

『はう……んッ！ あッ！ はあ……んッ……ふッ……』

「デュフフ、どうしたのかな二人とも」

《な、なんでもない、黙れ……》

「出る前にいっばいジュース飲んだからね、

そろそろだと思ったよ」

『そ、そんなあ……酷いでござる……』

「誰も居ないし、ガマンしなくてもいいんだよ？」

『そ、そんなワケにも……うッ……あう……』

《つく！ あッ……誰が、そんな動物みたいなマネを……》

「デュフフ……さて、それがいつまでもつかかな？」





『……んツ……あッ……はツ!』

はああーツツ!』

《な、ナカで動き出して……はツ!

はああツツ!』

「ほらほら、ガマンしたら身体に悪いよ?」

『××どの……あッ! くああ……

らッ! ああ……』

《らぐツ……つく……あッ!

ぐらうら……らッ……らッ……》

「はああ……二人とも

ピクピクしちゃって……

たまらん!」

『こ、こんな……あうツ!

ああッ! いッ……

む、ムリじゃないわー!』

《くあ……んツ!

ああ……だ、だめじゃ……

耐え切れ……

ふああッ!』

はああーツツ!』

ハイ

ア



『ふああーツツ!!』

《はああーツツ!!》

ああツ……あツ! はああツ!!》

『だめツ……ああツ!!』

とまらない……はあツ!!』

《ふあツ!! あツ……あふ!!》

ふあツ!! 見るな! 見るなあ!!》

「ブヒッ!

お外でおしっこすると気持ちいいでしょ?』

『いやあ! あツ……

きもちいらら……きもちいらら……あツ!!』

《クソツ……ふあツ!

とまれ……とまれえ……

あツ! はああツ!!》



『あッ……ああああ……あッ！ はあ……ふッ……』

『ふあッ……ああ……あッ……くあ……んッ……』

「デュフフ……二人ともいっぱい出したね、

おしっこで道がビシヤビシヤだよ」

『はああ……こんな、道の真ん中で、

拙者……あふ……ああ……』

『おのれ……ただではすまさん……』

絶対に……絶対に……』

「はあはあ……フビビ……」

漏らしながらイっちゃったのかな？

おしっこの匂いと一緒にエッチなおいもするお」

アホ  
アホ

アホ  
アホ

『らやあ……×××の……』

嗅いではだめでいける

『うッ……くッ……』

いっそ殺せ……』

殺してくれえ……』

《信じられん……信じられん……》

こんな、バカなことを……》

『さ、流石に拙者もこれはちよつと……恥ずかしいでござる』

『二人が運動したいって言うからお散歩に来たんだけどなあ……不満かな？』

《おのれ……覚えていろ……》

身体さえ元に戻れば、この屈辱は、かならず返してやる……》

『あう……んツ……歩くとなかで、

玩具が……ゴロゴロして……』

《下らんことばかりしておつて……》

くあツ……くあツ……あツ！

『うう……あツ！んツ！

ああ……はツ……んツ！

××殿お……

拙者、切ないでござるう……』

「フヒヒ！もうちよつと待っててね、

お楽しみはこれからだよ」

《……あッ……くぁ……んッ！ あ……》

『はう……んッ！ あッ！ はあ……んッ……ふッ……』

「デュフフ、どうしたのかな二人とも」

《な、なんでもない、黙れ……》

「出る前にいっばいジュース飲んだからね、

そろそろだと思ったよ」

『そ、そんなあ……酷いでござる……』

「誰も居ないし、ガマンしなくてもいいんだよ？」

『そ、そんなワケにも……うッ……あう……』

《つく！ あッ……誰が、そんな動物みたいなマネを……》

「デュフフ……さて、それがいつまでもつかかな？」

チチチ

ハイハイ



『……んツ……あッ……はツ!』

はああーツツ!』

《な、ナカで動き出して……はツ!

はああツツ!』

「ほらほら、ガマンしたら身体に悪いよ?」

『××どの……あッ! くああ……

らッ! ああ……』

《らぐツ……つく……あッ!

ぐらうら……らッ……らッ……》

「はあああ……二人とも

ピクピクしちゃって……

たまらん!」

『こ、こんな……あうツ!

ああッ! いッ……

む、ムリじゃないわー!』

《くああ……んツ!

ああ……だ、だめじゃ……

耐え切れ……

ふああッ!』

ザイ  
ザイ

ザイ  
ザイ

ザイ  
ザイ



『ふああーッッッ!!』

《はああーッッッ!!》

ああッ……あッ! はああッ!!》

『だめッ……ああッ!!』

とまらない……はあッ!!』

《ふあッ!! あッ……あふ!!》

ふあッ!! 見るな! 見るなあ!!》

「ブヒッ!

お外でおしっこすると気持ちいいでしょ?』

『いやあ! あッ……

きもちいら……きもちいら……あッ!』

《クソッ……ふあッ!

とまれ……とまれえ……

あッ! はああッ!!》



『あッ……あぁあぁあぁ……あッ！ はぁ……ふッ……』

『ふあッ……あぁ……あッ……くぁ……んッ……』

「デュフフ……二人ともいっぱい出したね、

おしっこで道がビシヤビシヤだよ」

『はぁぁ……こんな、道の真ん中で、

拙者……あふ……あぁ……』

『おのれ……ただではすまさん……』

絶対に……絶対に……』

「はぁはぁ……フビビ……」

漏らしながらイっちゃったのかな？

おしっこの匂いと一緒にエッチなおいもするお』

有。有。

有。有。

『らやぁ……×××の……  
嗅いではだめでいける  
……ふぁ……んッ……』  
『うッ……くッ……  
いっそ殺せ……  
殺してくれえ……』

























『ふあ……んツ！ ちゅば……ちゅ……あふ……ちゅる……』

《んちゅ……んツ……ちゅ……ちゅる……ちゅばあ》

「おうふ！ ユツキーのフワフワおっぱいとレオちゃんのピチピチおっぱいを同時に味わえるなんて……」

『あツ……んツ……ちゅる……××殿が嬉しそうで、

拙者も嬉しいでいける』

《くあ……ちゅる……ちゅ……》

《どうしてワシが、こんなことを……》

ニユルニユル  
ピチ  
ピチ

『あツ！ はう……拙者のおっぱいが、レオさまのおっぱいと絡んで……』

《あう……んツ……はツ……ば、バカもの、あまり動くな……》

「デウフア、ユツキーばかりに任せてないで、レオさまももっと頑張るお」

『そうでいける……レオさまもらっしよに楽しむでいけるよ』

《この、バカものども……》

《はッ……んちゅ……ちゅる……んッ……ちゅるる……》

「おふッ！ どうしたの？ 急に積極的になったねレオさま」

《こんなバカげたこと、さっさと終わらせてやる……  
あッ……んッ！ ちゅる……》

「そんなこと言って、ホントはチンポ好きにな  
って来たんじゃないのかな？」

《バカが……寝言は寝て言え……あッ……ちゅ、ちゅる……

ワシは早く動けるようになって、ガレットに帰らねばならんのだじゃ》

《ふあ……んッ……ちゅる……全く、舌が、おかしくなりそうじゃ……

ちゅる……ちゅ……》

ぽろ♡  
ぽろ♡

ねばあ…





《ふぁ……ああ……んッ……あ……乳首が……あうッ……》

『んッ！ はぁ……あッ……××殿お……拙者のおっぱい気持ちさらでい  
ぢるか？』

「はぁはぁ……レオちゃんの乳首がカリ首にヨリヨリしっつ  
ユッキーのおっぱいが外から包み込むう！ 最高だお！」

『恐縮至極にございますう……ふぁッ！』

ああ……ちゆる……ちゅ……」

《あふ……んッ！》

あッ……ちゆる……んッ！

あッ……ピクピクして……

んッ！》

ぬち♡

とろおん…  
おち♡

『はぁ……どくどく精液が昇って来てるの、

おっぱいを通して感じるでいぢる……』

《はッ……ちゆる……さっさとイってしまえ……この……》

『はう……んッ……ちゆる……ちゆる……××どのお……』

「はぁはぁ……もういかん！ ふ、ふたりとも顔に掛けるよー！」

「はあああんー!!」

『ぎやう! あッ! ふああッ!』

《はああッ! 熱ッ! ああ……くあ! はあッ!》

「おつふ! おお! しゃ、射精がとまん!」

『フフフッ……出た……出る……あッ……

もっとかけて欲しい……出る……拙者……』

《「……っちにも……あッ! はああッ!」  
「おくうッ! くおお……おおお!」



『はあ……はあ……んッ！ ああ……たっくさん出たでいけるな……』

《あッ……うあ……こんな、魔物みたいに出しておって……あう……》

『あッ……ふう……ドロドロでいける……ちゅ……』

拙者もレオさまもお……』

《こ、こら、お前だけ回復するな……》

んッ……ちゅる……んう……》

『はああ……ちゅ……××殿の精液は、  
いつも濃厚でいける……』  
《口のナカに、残りそうじゃ……  
ああ……ちゅる……ちゅる……》

ドロドロ  
ピクピク  
ピクピク















《うあッ……つく！ あう……あッ……あッ！》

触るな……ペカが……あッ！》

「んッ！ あッ……ああ……これえ……」

中でプルプルして……頭まで、響くでござる』

「ブビビ、やっぱりユツキーのお尻は柔らかくてぷにぷに、

レオさまのお尻は張りがあってピチピチって感じだね！」

「やあ……んッ！ ふあ……あッ……比べられるのは、

恥ずかしいでござる……」

《こんな、公の面前で……あッ！ まだ、下らんことを……

あッ……はう……》

あッ

さわっ……

さわっ……

「ブビビ、パイプの振動でお尻のお肉もプルプルしてるお！」

《くあッ……あッ！ わ、ワシらが声を上げて助けを求めたら

どうする気じゃ？》

「ああ、大丈夫大丈夫、こうすればいいから」

『はあッ！ んッ！ はああーッッッ！！ あッ！  
動きが、急に激しく……』

『んうう……あッ！ んうッ！ あッ……ふああーッッッ！！』  
「ブビビ！ そんなエロいカッコでそんなもの挿入れて  
歩いてる女の子なんて、世間じゃ変態扱いなんだよね。

誰も相手にしてくれないよ?」

『あくッ……ああッ！ やッ……ひどい……』

あぐッ！ んッッ！

『くあッ！ ぐッ！ あッ……はああッ！！

だ、ダメじゃ……奥に、ズンズンきてえ……』



ぐッ

グッ

グッ

『あッ……足が……くずれそ……ふあッ！

はッ！ ふああーッッ……』

『はああーッッッ…… あッ……ああッ……

はあッ……』



『はぁぁーッッッ!』

《んくッ! ふううーッッ!》

『はぁッ! あッ……んッ! あぁ……ふぁッ! あ……めめ……』

《ぁぁッ……だ、ダメじゃあ……

頭が、真っ白になって……ふぁ……

とめられな……あう!》

「アビビ、二人ともいけない子だななあ……

僕の手がぬるぬるになっちゃったじゃないか」

《ひやう! この……バカ……

言っていないで、これえ……止める……はぁ!》

『あうう……んッ! あッ! あぁ……  
せ、拙者……ダメで……る……もお……』  
《ナカが……ぐちやぐちやに……ふぁッ!  
あッ……ぁぁッ……はぁッ!》  
『ほ、本物のちんぽみたいで……  
あッ! はぁぁッ! ま、またイク!  
いつちやううーッッ!』

ビクビク♡

ビクビク♡

ヌルッ♡

ヌルッ♡

「デユフフ、もう十分かな？」

「はあ……はあ……はあ……ふああ……」

《あッ……ああ……はッ……このワシが……こんな玩具でえ……》

「ふあ……あッ……人前で……あッ……」

皆に、見られてるでござる……ああッ……」

「フビビ、そうだね、通報されないウチに

家に帰るうか。デユフフ……」

今日もゆっくり可愛がってあげるよ？」

《この……クズが……あッ……」

ふッ……ああ……いいかげん、

尻から手を放せ……》

はあ

はあ

チロロ……

チロロ……

『あふ……んッ……あッ……拙者のお尻、

そんなに気に入ったでござるか？』

「デユフフ……ああ……幸せだなあ……」









んっ

ズッポ

《おのれ……また……ワシに  
下らんことばかりさせおって……》  
「はあはあ……ブルマに沁み込んだ  
汗の匂いがたまりませんなあ……」

《はう！ あッ……そんなトコロ、  
臭くな……あうッ！》

「はあはあ……メスの匂い  
がするお？」

おちんぼくわえて発情して  
るのかな？」

《だ、だれが……ワシはただ、  
仕方なく……》

ズッポ

ズッポ

「ズビビ、そんじゃ、

さっさと仕方なく

プロペロするとららお」

《いっの……下衆が……》

んッ……ちゅる……ちゅる……》

《あッ……ふッ……ふぁ……ん

ッ……ちゆる……ちゅ……》

「はぁはぁ……**正**とおっぱいの

感触が最高だお……

おまんこからもどんどん

雌臭がしてきて……」

《やめる……嗅ぐな……

ふぁ……んッ……

ちゆる……ちゅ……》

「アビビ……

おちんぼは美味しいかな

レオちゃん」

《美味しいワケがないだる……

こんなもの……ちゆる……

ちゅばぁ……》

ポ  
チゅばぁ

ん

ドク……

ヒクッ

ビクッ

ニャ

「そのワリには

積極的にフェラ

してるよねえ……

パイズリも楽しそうだし……」

《そんなワケ……んッ……

ちゆる……パカが……お前は黙って、

さっさとイってしまえ》

「アビビ……それじゃ、お言葉に甘えて……」



「ほら、いくよ！」

深くくわえこんで！」

《ま、待て……んぶツ！

んツ！ ふうう「一ツ！一ツ！」《

「フビビ！ レオちゃんのお口

にナカダシいっ！」

《んうう！ あツ……んう！

うツ……ふう！》

「ほら、零しちやだめだよ？

そのまま口の中に溜めこんで…

残りの精液も吸い出すんだ」

《んツ！ んうう……ちゆる…

ちゆ……んちゆ……》

「おふ！

バキュームフエラくるうう！

またいきそう！」

《んツ！ ふうう！

んう……あツ……んう！》

おふ

んツ

「フビビ……らっぽらっぽら」

溜め込んだね？

ほーら、口のナカで

くちゅくちゅして

味わうんだ」

《ん……ううう……くちゅくちゅ……

くちゅくちゅ……ちゅるるる……

くちゅ……》

「美味しいかい？」

たっぷり味わってから

「っくんするんだよね」

《ま、だが……しかし、なんじゃこの……》

ん……！ くちゅくちゅ……ちゅる……あッ……

《……ちゅる……ちゅる……ちゅる……ちゅる……ちゅる……》

《……ちゅる……ちゅる……ちゅる……ちゅる……ちゅる……身体が、熱……》

《んっ……んへんへん……いへん……》

「さめ……ぶあッ！

ああ……ぶああ……》

「デユフフ……どうかかな？

美味しかった？」

《濃すぎて……ふあ……喉に、

からみつくようじゃ……ああ……》

《身体中が疼いて……んっ！

あ……アソコが……

ムズムズする……はう！》

「はあはあ……

どうりでメス臭がキツツくなってる

ワケだよ」

《やあッ！ あ……息が……

臭くなあ……んっ！ はう……》

「ブビビ……

次はこっちにぶつとい

おちんぼぶちこんであげるからね！」

《あうッ……あッ……はあ……んっ！

ふああ……この……底なしが……ああ……んっ……》













「んツ……はあ……ふあ……××殿お……気持ちいいでござるか?」

「おっひよー! やっぱりユツキーのふわふわエロおっぱいは最高だお!」  
「照れるでござる……んツ……ああ……ふツ……」

拙者もこうするのは、メツチャ好きでござる」

「××殿のおちんぽが……拙者のおっぱいのナカでピクピクして……  
ふあ……カワイイでござる……」

「フビビ……ユツキーは積極的だなあ……」

安心してマグロになれるよ」

「かまわんでござるよ……」

拙者がたっぷり、イかせてあげるでござる……」

「ふあツ……あツ……んツ……」

××殿のおちんぽにおい……ふああ……」

ニユル  
ニユル  
ヌ  
フ  
フ

「んっ……ふあッ……ふッ……ああ、ガマン汁が……  
んっ……ちゆる……」

「本当に、おっぱいが好きでいけるなあ……」

んっ……あッ……ちゆる……ちゅ……」

「フビビ、ユツキーも僕のおちぽ好きだよね」

「大好きでいける……あッ……ちゅ……」

とってもたくましくて……可愛くて……ちゅる……」

「あッ……ふあ……んっ！ 胸に挟んでらる……」

幸せな感じでいける……んっ……ちゅる……」

「フビビ！ ヲツキーもっトトアアアすっつー！」

「んっ……アアでいけるか？ んあ……はあ……」

拙者のおっぱいが……」

××殿のおちんぼの形にゆがんでしまうでいける……んっ！」

「はあはあ……た、たまらん！ イくよユツキーー！」

パ  
チュ  
ン

ピ  
チュ  
ン

「イっくううーッ!」

「ふあ! あッ! あ……ぶッ!

あッ……ああ……か、顔にら……」

「あ、熱ッ……んッ! ああ……ほッ……ッ! ふああ!」

「はあはあ……うッ! ちんちん……」

「あう……咄し過ぎでいける……あ……こんな……」



「頑張ったねユツキー……よしよし」

「あう……んツ……はツ……」

「そんな、なでなでされたら……ああッ……」

「どうしたんだいユツキー？」

「頭を撫でられると……その……もっ……」

ぬちが…

お…

「撫でられるのが好きなのかな？」

「じゃ、もっとなでてあげる」

「あッ……ふあ……ああ……んツ

……あッ……ああ……」

「あッ！ あふ……んう……あッ！

はあ……ああ……身体が……ああ……」

『××殿……その、お願いでいいから……』

「ん？ どうしたんだい？」

「その……おちんちんを抱きしめながら、頭を撫でられていると……か、身体が……」

「身体が……キュンキュンして……アツコが、疼いてしまって……んッ……」

「頭が熱くて、トロトロでえ……」

お願いでいいから……××殿お……』

「アビビ、ユツキーの方からおねだりなんてなんて萌える……いや燃える！」

『あうう……恥ずかしいでいいから……』

「仕方ないなあ……」

「このままガチガチちんぽでズッコンバッコンしてあげるよユツキー」

『あッ……ああ……う、うれし……××どのお……』













『ふあッ！ あッ……はあッ！ あッ！ くッ……深い！』

ああッ！ はああーッ！』

『おふ！ ユツキーのふわとろおまんこ……』

奥まで飲み込まれるおー！』

『あッ……くあ！ ああ……す、す……でいけるー！』

子宮に、××殿のが……直接当たって……ふあッ！』

『ブビビ、子宮口が亀頭にキスしてるのが分かるお？』

ずぶずぶ

『あう！ あッ！ はッ！ ああ……んッ！』

ああ……らぐッ……れえ……ちりちり……ちりちり……』

『××殿に、包み込まれて……あッ……はうッ！ はああ……んぐッ！』

『ナカも、××殿の熱いので、らっばらで……ふあッ！ はああ……』

「うッ……ああ……××殿……もっど、もっどして欲しんでいる……」  
「ブビビ、すっかり発情しちゃって、ユツキーはしようがないなあ……」  
「あうッ！ あッ……ふッ……ああ……はあッ！」  
「……気持ちいら……あッー！ はああッー！」  
「奥まで……感じるでい……××殿お……ふあッー！」  
んッ……ああッー！」

「おふ！ ユツキーのエロボディが僕のチンコに絡みつくらう！」  
「あうッ！ ん……ああ……はッ！」  
「……もっど、もっど感じて欲しんでいる……あッー！ んう……」



「んあッ……はッ！ ああ……んッ！ はう！ あッ……  
好きい……大好きでいける……んッ……」

「ふむッ！ んッ……ちゅるー！」

「はッ……んッ……ちゅる……ちゅる……あッ……ちゅる……ちゅる……  
『ふばッ……あッ……舌が、とろけそうでいける……』



「デュフフ、ユツキーはキス好きだねえ……」

「何度でもするでいけるよ……あッ……んちゅ……ちゅる……  
ちゅ……ちゅるりゅるりゅる」

「おっふう……ら、今ユツキーと、いつかあって……んちゅる……  
ちゅるりゅるりゅる……」

「あッ……ふッ……ちゅる……んッ……あッ……あッ……  
気持ちいい……気持ちいい……」

「はあはあ……いッ、いくよユツキー！」

「はい！」「このまま……一番奥でえ……ふあッ！ だ、出して！」

「デユフ！ ユツキーの子宮にゼロ距離発射だお！」

「ふあッ！ あッ……あッ！ はああ——ツツッ——！」

「はあッ……あッ……くるッ……直接……」

ふあッ……ああ……ドピュドピュ入ってくるッ……」

「××殿の……精液……直接、子宮に……はあッ……んッ……ああ……」

「まだ、ピクピクして……んッ……ああ……はッ……ふあ……はあ……」

















「はあッ……あッ……んああ……××殿お……」

早くしてほしいでござる……」

《つく！ 正気に戻れ天狐……こんなこと、無意味じゃ……》

「やれやれ、レオさまは相変わらさずツンツンだなあ……」

ちんぽぶち込まれたらすぐデレッデレになるくせに……」

《黙れケダモノ……ワシが貴様に心許すことなど、有り得ん……》

「そんなに脚開いておねだりしてるのに？」

《こ、これは……力を取り戻すために、しかたなく……》

「はいはい、それじゃ、そういうことでいいお」

「ちよ……」



『……はッ！ ふああッ！』

《ひやう！ あッ！ ふああーッッ！》

「さて～今日はどっちのおまんこにしようかな～？」

『はッ……ふッ！ ああ……んッ！ はああッ！』

《こ……こすれて……あッ！ ふあ……んッ！ ああ！》

「フビビ！ 二つのお豆さんが亀頭にヨリヨリ当たるお！」

『はああッ！ んッ！ ふああ……あッ！

だめえ……んああッ！』

《ここの……んッ！

ああ……はッ！ ああ……》

いぢぢ

ぬぢぢ



「デユフフ……じゃ、まずはユツキーのおまんこから行くおー！」

「ふあッ！ あッ……んぐ……あッ……はああッ……！」

「フビッ！ ユツキーのふわとろおまんこがチンコに絡むうー！」

「はうッ！ あッ……んく……ふああ……××殿お……」

「気持ちいいわー！」

「フビビ！ 僕もとっても気持ちいいおー！」

《……つく！ 動くなバカども……んッ！ ふあッ……つく！》

「デユフフ……レオさまにもすぐぶち込んであげるから、

切なそうな顔しないで欲しいおー！」

《誰が……つく！ うあ……はあッ！》

「んッ！ はああッ……！ はあ……ピクピクして……」

ああ……感じるでいげろー！ ふああッ……」

ズ  
グ  
グ……



「ブビツ！　いくよユツキー！」

「はい！　いつでも……んツ！」

ああ……拙者のナカに、ぶちまけて欲しいでござる！」

「あうツ！　ああ……おちんぼ、ビクビクしてえ……んツ！」

ああ……ふあツ！」

「ブビビ！」

ユツキーのふわとろおまんこに  
ナカダシいいーツ！」

「ふあツ！　はああーツツ！　きたああーツツ！」

精液……ああツ！」

「はああ……んツ！　あつたかいでござる……」

んう……あツ……はああ……」

《はう……つく……ああ……脈動が、

こっちまで、伝わって……んツ！》

「ケツグッ」

「ケツグッ」





『はう……あッ……ああ……××殿のナカダシい……  
す……で……る……』

「デュフフ……ユツキーのおまんこも相変わらず最高だお」

《ふあッ……んッ！ す、済んだなら早くどけ……不快じゃ！》

「そんなこと言って、レオさまもおまんこトロトロじゃないか……」

『あッ……んう……レオさまもお……』

おちんぼしてもらうでござるよ』

《いい加減に口を閉じろ天狐……》

ワシは、貴様のように快楽に流されたりは……》

「はいはい、それじゃあ

ツンツンタイムは終了してもらおうお！」

ゴッ

ぽふ

《くあッ！ はあ……や、やめるお……挿入れるな……  
挿入れるなあ……はああッ！》

《あぐツ！ はッ！ はああーッツツ！》

「デュフ！ レオさまのキツキツおまんこがチンポ締め付けるうー！」

《はぐツ！

あッ……んあ……はあッ！ ここの……やめるお……はあッ！》

「フビビ……まるでロリみたいなおまんこだよ、

ユツキーのふわとろ加減とはまた別の快感が……」

『あう……

女の子のおまんこを比べたらダメでござる……』

「デュフフ……ごめんごめん、二人とも最高だよ！」

《はあッ！ つく……

ああ……ナカで……うごいて……はあッ！》

「おっふー！

いったばかりだから敏感で……

レオさまそんなに締め付けたらあ……つくー！」

ズッ  
グッ  
グッ

ク  
ク  
ク



《あぐツ！ はッ……ああッ……んツ！ はああッ！》

「い、イクラ！ レオさまのキツキツマンコにナカダシのらー！」  
《いやああー！ツッ！ はあッ！ あッ……ふああー！ツッ！》  
「つく！ ナカがうねって……搾り取られるう！」  
《つく！ あッ……ああ……こ、こんな……あッ！ うう……ああ……》  
『レオさま気持ちよさそうでごゆる……』  
《パカが……こんなの、気持ちいい訳が……  
んッ！ ふあ……ああ……》  
《ナカに、入って来てえ……んッ！  
ああ……はあッ！》

フェルル

ド



《はあ……はあ……はあ……あッ……はあ……》

『んッ！ はッ……あッ……ふう……あッ……』

「ブビビ、二人ともたっぷり出してあげたのに、まだ物足りない顔だねえ…」

『あう……××殿お……拙者……もっとな可愛がって欲しいでござるう……』

《も、物足りないのは、貴様の方ではないのか……》

好きにすればよからう』

「フビビ、

それはおねだりとしていいのかな？ 二人とも』

『はう……そうでござる……もっとな……拙者、

××殿のちんぽぶちこまれたいでござる……』

《で、天狐だけにしては……》

ワシが回復できんだろ……かまわんから、早く……》

「デユフフ……それウツだったんだけどなあ……」

ま、いいか……

二人ともたっぷり可愛がってあげるお！』

あッ  
あッ  
あッ





Y

ン

ン

ト

ン  
お  
お  
...



END

「はあッ……あッ……んああ……××殿お……」

早くしてほしいでござる……」

《つく！ 正気に戻れ天狐……こんなこと、無意味じゃ……》

「やれやれ、レオさまは相変わらずツンツンだなあ……」

ちんぽぶち込まれたらすぐデレッデレになるくせに……」

《黙れケダモノ……ワシが貴様に心許すことなど、有り得ん……》

「そんなに脚開いておねだりしてるのにな？」

《こ、これは……力を取り戻すために、しかたなく……》

「はいはい、それじゃ、そういうことでもいいお」

「ちよ……」



『……はッ！ ふああッ！』

《ひやう！ あッ！ ふああーッッ！》

「さて〜今日はどっちのおまんこにしようかな〜？」

『はッ……ふッ！ ああ……んッ！ はああッ！』

《こ……こすれて……あッ！ ふあ……んッ！ ああ！》

「フビビ！ 二つのお豆さんが亀頭にヨリヨリ当たるお！」

『はああッ！ んッ！ ふああ……あッ！

だめえ……んああッ！』

《い……この……んッ！

ああ……はッ！ ああ……》

いぢぢ

ぬぢぢ



「デユフフ……じゃ、まずはユツキーのおまんこから行くおー！」

『ふあッ！ あッ……んぐ……あッ……はああッ……！』

「フビッ！ ユツキーのふわとろおまんこがチンコに絡むうー！」

『はうッ！ あッ……んく……ふああ……××殿お……』

「気持ちいいわー！」

「フビビ！ 僕もとっても気持ちいいおー！」

《……つく！ 動くなバカども……んッ！ ふあッ……つく！》

「デユフフ……レオさまにもすぐぶち込んであげるから、

切なそうな顔しないで欲しいおー！」

《誰が……つく！ うあ……はあッ！》

『んッ！ はああッ……！ はあ……ピクピクして……』

ああ……感じるでいけるー！ ふああッー！

ズ  
グ  
グ

しん

「ブビツ！　いくよユツキー！」

「はい！　いつでも……んツ！」

ああ……拙者のナカに、ぶちまけて欲しいでござる！」

「あうツ！　ああ……おちんぼ、ビクビクしてえ……んツ！」

ああ……ふあツ！」

「ブビビ！」

ユツキーのふわとろおまんこに  
ナカダシいいーツ！」

「ふあツ！　はああーツツ！　きたああーツツ！」

精液……ああツ！」

「はああ……んツ！　あつたかいでござる……」

んう……あツ……はああ……」

《はう……つく……ああ……脈動が、

こっちまで、伝わって……んツ！》

ケルル

ケルル

『はう……あツ……ああ……××殿のナカダシい……  
すこらでいける……』

「デュフフ……ユツキーのおまんこも相変わらず最高だお」

《ふあツ……んツ！ す、済んだなら早くどけ……不快じゃ！》

「そんなこと言つて、レオさまもおまんこトロトロじゃないか……」

『あツ……んう……レオさまもお……』

おちんぼしてもらうでござるよ』

《いい加減に口を閉じろ天狐……》

ワシは、貴様のように快楽に流されたりは……》

「はいはい、それじゃあ

ツンツンタイムは終了してもらおうお！」

ゴッ

ぽふ

《くあツ！ はあ……や、やめるお……挿入れるな……  
挿入れるなあ……はああツー！》

《あぐツ！ はッ！ はああーッツツ！》

「デュフ！ レオさまのキツキツおまんこがチンポ締め付けるう！」

《はぐツ！

あッ……んあ……はあッ！ ……この……やめるお……はあッ！》

「フヒヒ……まるでロリみたいなおまんこだお、

ユツキーのふわとろ加減とはまた別の快感が……」

『あう……

女の子のおまんこを比べたらダメでござる……」

「デュフフ……ごめんごめん、二人とも最高だお！」

《はあッ！ つく……

ああ……ナカで……うごいて……はあッ！》

「おっふー！

いったばかりだから敏感で……

レオさまそんなに締め付けたらあ……つくー！」

ズッ  
チンポ

ク  
チンポ



《あぐツ！ はッ……ああッ……んツ！ はああッ！》

「い、イクう！ レオさまのキツキツマンコにナカダシのらー！」  
《いやああー！ツッ！ はあッ！ あッ……ふああー！ツッ！》  
「つく！ ナカがうねって……搾り取られるう！」  
《つく！ あッ……ああ……こ、こんな……あッ！ うう……ああ……》  
『レオさま気持ちよさそうでごじやる……』  
《パカが……こんなの、気持ちいい訳が……  
んッ！ ふあ……ああ……》  
《ナカに、入って来てえ……んッ！  
ああ……はあッ！》

フェルル

ド



《はあ……はあ……はあ……あッ……はあ……》

『んッ！ はッ……あッ……ふう……あッ……』

「ブビビ、二人ともたっぷり出してあげたのに、まだ物足りない顔だねえ…」

『あう……××殿お……拙者……もっとな可愛がって欲しいでござるう……』

《も、物足りないのは、貴様の方ではないのか……》

好きにすればよからう』

「フビビ、

それはおねだりとしていいのかな？ 二人とも』

『はう……そうでござる……もっとな……拙者、

××殿のちんぽぶちこまれたいでござる……』

《で、天狐だけにしては……》

ワシが回復できんだろ……かまわんから、早く……》

「デユフフ……それウソだったんだけどなあ……」

ま、いいか……

二人ともたっぷり可愛がってあげるお！』

あッ  
あッ  
あッ







END













































